

身体表現に対する意識の変化

—領域表現の授業実践から—

中村 真緒

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示される領域「表現」は、幼児にとって豊かな感性を育むために非常に重要な領域の 1 つと考える。身体表現では、保育施設などに就職した際、保育教諭としてお遊戯会、運動会などで創作活動（ダンス）を保育者主体で行うこととなる。しかし、現代の保育学生は運動の経験も乏しく表現についても苦手意識を持つ者も少なくない。この点について、保育者養成校としては解決策を検討する必要があるといえる。本稿は、「表現指導法」の授業内容を対象とし、学生が身体表現に対してどのような意識を持ったかに焦点をあて、アンケートによる調査を実施し考察した。その結果、活動に対してポジティブな印象がみられたが、苦手意識が改善されない学生もみられ課題が残った。今後は担当教員の専門性の向上や、身体表現領域の内容充実などカリキュラムの検討が必要と示唆された。

I. はじめに

2017（平成 29）年に改定（改訂）された「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を受け、改正がなされた教員養成機関における教職に関わる科目では、「教職課程コアカリキュラム」が提示された（文部科学省，2017）。コアカリキュラムには、全国全ての教職課程で修得すべき資質能力を共通で示すものであり、加えてそれぞれの地域や保育現場のニーズに対応した教育内容の構成が必要となり、保育者養成課程の授業担当者には、各科目に必要な事項の見直しや構成が求められることとなった。新教職課程では、領域及び保育内容の指導法に関する科目において「何を教えるか」から「何ができるようになるか」という視点へ発展させ、具体的な指導場面を想定した保育を構想する力を学生自身に身に付けることが求められている。よって、各保育者養成校の特性や独自性も含めながら、今後の社会に求められるより質の高い幼児教育の推進を目指すことになった。

現代の保育学生について、身体運動の点で課題があるとされている。保育学生は同世代の全国平均よりも体力・運動能力が低い傾向にあり、運動経験自体が少ないと推測される（川上暁子ら，2017）。さらに、2 年間の保育者養成課程在学中に学生の体力・運動能力が低下するとの報告もあり（渡辺，2011）、身体を動かすという経験自体が日常的に不足している可能性がある。また、身体を動かすだけでなく「身体を使って表現する」こと

について苦手意識を持つ者もみられるが、保育施設などに就職した際、保育教諭としてお遊戯会、運動会などで創作活動（ダンス）を行うこととなるため、保育者養成校としては解決策を検討する必要があるといえる。

そこで本研究では、1 年次の後期に保育士資格及び幼稚園教諭免許状取得に必修科目である「表現指導法」において、担当者の専門である身体表現に着目し、活動前後の変化や意識の調査を行う。保育養成校の学生が身体表現に対して、どのような意識を持ったかに焦点をあて、アンケートによる調査を実施し考察した。その教育的効果と保育者養成校としての課題やてだてを明らかにすることを目的とした。

II. 内容/身体表現活動

本講義は、保育内容の各領域を総合的に捉え表現活動を中心に乳幼児の実態に応じて保育内容の展開や指導法を学ぶ。到達目標は「身体の動きや五感、音やリズム、ものの色や形や質感など様々な表現ツールを用いて表現活動の特徴や面白さを確認し応用や発展を考え実践を重ね、総合的な表現活動を構想、計画、指導、実践する力を身に付けること」とした（表 1）。示された「ねらい及び内容」は、幼児だけでなく保育学生自身が持つべき資質として考えるべきであろう。下記に示した「表現」の内容から、身体的な要素が含まれるものは 1, 2, 3, 4, 5, 6, 8 となり、多くの項目で見られた。

領域のねらい及び内容を踏まえ、講義内容については身体表現の実践的な経験ができるような演習を取り入れた（表 2）。演習では、学生自身が表現する体験を通して感性を磨くとともに、表現活動を取り入れた保育現場を想定して展開する力を育むことを目指した。さらに、事前・事後の学習として、それぞれの遊びの記録や振り返りなどのレポート作成にも取り組み、演習の理解をより深めた。

表 1. 領域「表現」のねらい及び内容

感性と表現に関する領域「表現」
ねらい
1. いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 2. 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 3. 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内容
1. 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。 2. 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 3. 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 4. 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。 5. いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 6. 音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。 7. かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。 8. 自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。

表 2. 「表現指導法」の授業計画

回	月日	授業計画	活動内容
1	9月22日	オリエンテーション	幼児教育・5領域・資質能力との関連
2	9月29日	領域表現について(1)	「表現」のねらい 内容及び内容の取扱いの理解
3	10月6日	領域表現について(2)	乳幼児期の発達と表現
4	10月13日	身体表現①	身近な素材を使った表現/事前アンケート
5	10月20日	領域表現について(3)	自然やものの美しさに触れる
6	11月3日	造形表現・身体表現②	新聞ファッションショー
7	11月10日	身体表現③	幼児の体操・ダンスの創作
8	11月17日	身体表現④	ダンス発表/事後アンケート
9	11月24日	造形表現②	小麦粘土
10	12月1日	模擬保育①	ガイダンス
11	12月8日	模擬保育②	指導案の作成
12	12月15日	音楽表現	リトミック、リズム遊び
13	12月22日	模擬保育/グループ練習③	計画と練習
14	1月12日	模擬保育④	グループ発表①
15	1月19日	模擬保育⑤	グループ発表②

① 身近な素材を使った身体表現

廃材を活用した遊びの展開を学ぶため、新聞紙を活用した表現遊びを行った。まず初めに、新聞紙を落とさないように身体につけて走る・新聞紙を投げ上げキャッチするなど、基本的な運動要素に新聞紙を取り入れた。また、2人1組で協力し合う遊びでは、投げ上げた新聞紙の下をもう1人が潜り抜けるなど、ダイナミックな動きを誘発させた。さらに、ゲーム要素を取り入れた身体表現遊びとして、オノマトペなどを動きとして即興で表す「言葉と身体の表現遊び」や、取り上げた題材から踊りにしたら面白そうな場面や動きをカードにする「表現カルタ」を取り上げた。保育現場を想定し、楽しくイメージを膨

らませる活動とした。

② 新聞ファッションショー

造形表現との複合的な表現活動として、新聞を使ったファッションショーを行った。まず、幼い頃に夢に描いた職業や憧れの人を想像し、デザインを考えるよう指示した。そこから、新聞紙とセロハンテープで装飾する物を制作し、完成したものを身に付け発表を行った。発表については、動画撮影したものを編集・共有することで、振り返りの教材として活用した。

③ 幼児の体操・ダンスの創作

準備体操として、幼児向けの体操や簡単なステップを音楽に合わせて行った。

ダンスについては、「ツバメ/YOASOBI」を課題曲とし、指定した歌詞部分に合わせて創作するよう指示した。グループは 5～6 名とし、他者と連携・協力ができるような体制とした。発表については、他のグループの作品を客観的に評価するため、気付いた点・良かった点などを記入し学びに繋げた。また、動画撮影したものを編集・共有することで、振り返りの教材として活用した。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

対象授業科目名：「表現指導法」

対象者：ユマニテク短期大学幼児保育学科 1 年次（「表現指導法」の受講生）49 名とした。体調不良などの理由により授業を欠席した場合、その回の調査は対象外とした。また、アンケートは実践前後に 1 回ずつ行ったため、前後計 2 回の回答を満たした者のみを対象とした。

2. 調査時期

2023 年度（2023 年 10 月から 12 月）実践活動前後にアンケート調査を行った。その際、アンケートについての説明を行い、1 週間ほど回答期間を設けた。

3. 調査方法

インターネットサービスの Google フォームを用い、Web 形式でのアンケート調査を行った。

4. 調査内容と分析

アンケートの質問項目は、2 件法の選択肢による「体操やダンスの経験について」「身体表現の指導について」と、4 件法の選択式及び記述式による「実践前後における印象と

変化」を計項目とした．分析方法として，各回答の割合（％）を算出し，実践前後の比較を行った．

5. 倫理的配慮

対象施設および対象者には，本研究の目的と方法，個人情報守秘義務等についての十分な説明を行い，研究参加に対する承諾を得た者のみ回答するよう説明を行なった．研究への協力は本人の自由意思であり，同意が得られたと判断した場合のみ，回答の受付を行った．なお，本研究は，ユマニテク短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた（承認番号第 23-004 号）．

IV. 結果および考察

1. 体操やダンスの経験（回収率 90％）

体操やダンス経験の有無について尋ねたところ，「ある」と回答した学生は 44 名中 15 名（34.1％）であり，経験のない学生が半数以上であった（図 1）．

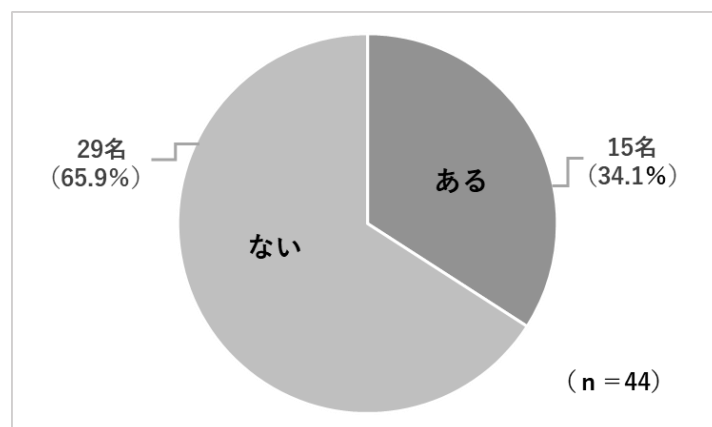


図 1. 体操やダンス経験の有無について

2. 身体表現（表現遊び）について

「身体表現（表現遊び）」について実施前に自由記述にて印象を尋ねたところ，「楽しい（楽しそう）」「知識や技術を身に付けたい」「乳幼児に重要」「個性を出せる」「リフレッシュできる」「克服したい」とのポジティブな回答が見られた．一方で，身体を使って表現することが「恥ずかしい」「得意ではない」「苦手」「難しい」「理解できない」などのネガティブな回答が見られた．

恥ずかしさよりも楽しさが勝る積極的な学生にとっては，非常に楽しい活動であるが，ダンス等が未経験や元々持った苦手意識によって印象が変わると考えられる．

3. 実践前後における印象の変化

3-1. 身体表現について（回収率 90%）

身体表現に対する印象について尋ねたところ、活動前は「とても好き」が 10 名（22.7%）、「やや好き」27 名（61.4%）、「やや嫌い」6 名（13.6%）、「とても嫌い」1 名（2.3%）であったのに対し、活動後には、「とても好き」が 9 名（20.5%）、「やや好き」が 30 名（68.2%）、「やや嫌い」4 名（9.1%）「とても嫌い」1 名（2.3%）となった（図 2・3）。

身体表現に対して多くの学生がポジティブな印象を持っており、その印象は活動後も変化することなく保たれた。大きな変化は無かったが、数名の学生は活動後にネガティブな印象からポジティブな印象へ変化したことがわかった。

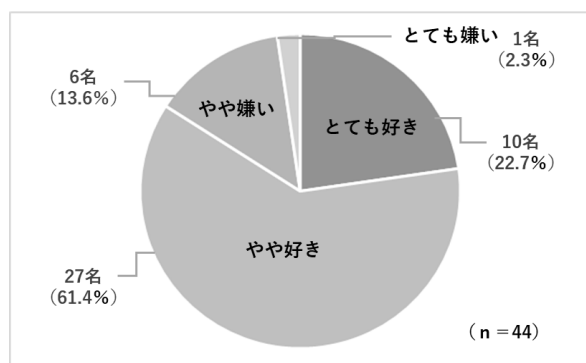


図 2. 身体表現に対する印象（活動前）

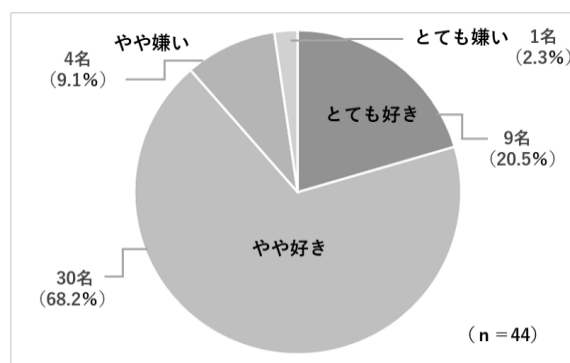


図 3. 身体表現に対する印象（活動後）

3-2. 身体表現遊びの活用について（回収率 90%）

実際に身体表現遊びの活用ができるかについて尋ねたところ、活動前は「できる」17 名（38.6%）、「できない」が 27 名（61.4%）であったのに対し、実践後には、「できる」が 30 名（68.2%）、「できない」が 14 名（31.8%）となった（図 4・5）。

「いいえ」と回答した理由に挙げられた意見には、「臨機応変に対応できない」「自信がない」「知識が少ないから」「運動が得意でないため」などがあつた。

以上の結果から、身体表現遊びの活用に対して、活動後に多くの学生が自信を持つことができた。しかし、「できない」と回答した学生が 14 名みられる点が課題となった。体験するだけでなく、学生自身が主体的に活動でき成功体験を積み重ねることや、保育現場を想定した対応の方法を含め、授業内容の精査と構成検討の必要性を感じた。

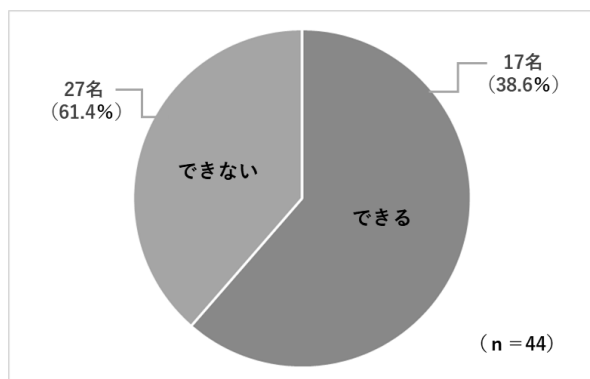


図 4. 身体表現遊びの活用について（活動前）

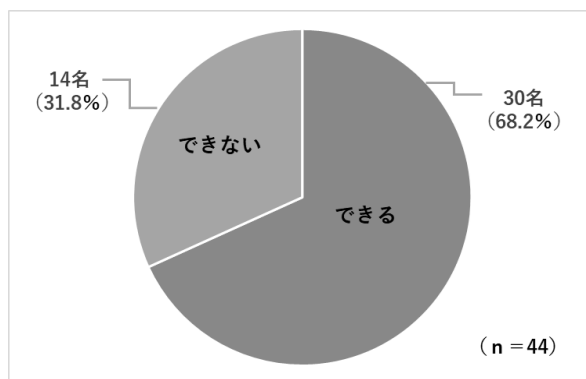


図 5. 身体表現遊びの活用について（活動後）

3-3. 保育・教育への取り入れについて（回収率 90%）

将来、身体表現遊びを保育や教育に取り入れたいかについて尋ねたところ、活動前は「はい」が 42 名（95.5%）、「いいえ」が 2 名（4.5%）であったのに対し、活動後には、「はい」が 43 名（97.7%）、「いいえ」が 1 名（2.3%）となった（図 6・7）。

「いいえ」と回答した理由に挙げられた意見には、「楽しい指導ができるのであれば取り入れたい」とのことであった。

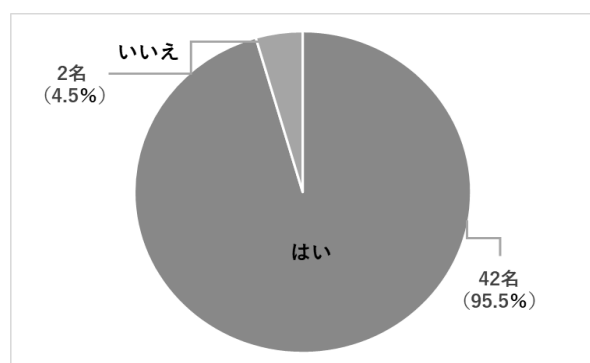


図 6. 保育・教育への取り入れについて（活動前）

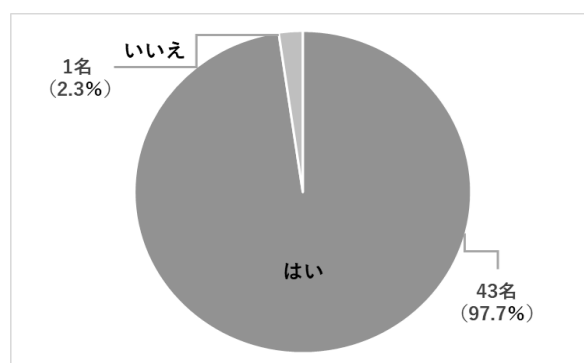


図 7. 保育・教育への取り入れについて（活動後）

4. 身体表現を通して感じたこと

身体表現活動を通して感じたことを自由記述にて尋ねたところ、「恥ずかしさを克服できた」「やりがいを感じた」「表現する楽しさがわかった」との気持ちの変化に対するポジティブな意見が多く寄せられた。また「グループの人に助けられた」「協力する大切さを感じた」「チームワークが活かされ素晴らしい作品ができた」など、保育者に必要な他者と連携・協働する経験から、多くの力を身に付けることができた。

V. まとめ

本稿は、2023 年度後期に実施した「表現指導法」の授業内容を対象とし、保育養成校の学生が身体表現に対して、どのような意識を持ったかに焦点をあて、アンケートによる調査を実施し考察した。その結果、活動前後にポジティブな印象がみられたが、苦手意識が改善されない学生もみられ課題が残った。

本学は、音楽・造形に特化したそれぞれ科目が設けられているが、身体表現については単独の科目が設定されていない現状がある。そのため、「表現指導法」の中でわずかな回数を取り入れる形となり、授業内容が充実しているとは言い難い。今回の結果からも、数回の活動によって学生の意識向上は難しく、内容の精査も含め検討が必要と考える。

また、幼稚園・保育所（園）・認定こども園は、学校教育の基礎を養う幼児教育機関として改めることで、小学校教育との接続についても求められている。幼児教育における「領域表現」の表現遊びは、小学校の低学年「体育」において項目が見られ（文部科学省，2017），小学校教育との接続を意識した身体表現活動の教育内容についても、今後研究を深め手立てを見出す必要がある。今後は保育者養成校として、担当教員の専門性の向上や関連科目との連携をはじめ、それぞれの内容充実などカリキュラムの在り方を検討していきたい。

VI. 謝辞

本研究の遂行に当たり、研究対象としてご協力いただいたユマニテク短期大学の皆様に心から御礼申し上げます。

VII. 引用・参考文献

- 1) 一般社団法人 全国保育士養成協議会（2018）「全国幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程を併設する際の担当者及びシラバス作成について」
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/30-3s6.pdf（閲覧年月日 2023 年 12 月 20 日）
- 2) 上村眞生（2011）「保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究—保育士の経験年数による検討—」広島大学大学院教育学研究科紀要（60）：249—257
- 3) 川上暁子、増田未来、竹内秀一（2017）「保育者養成のための身体を動かす授業を考える保育学生の体力・運動能力調査に関する先行研究の把握」武蔵野教育學論集。
- 4) 厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説書」
- 5) 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」
- 6) 無藤隆代表 保育教諭養成課程研究会編「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか —モデルカリキュラムに基づいた提案—」東洋館出版社

- 7) 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 体育編」
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afielldfile/2019/03/18/1387017_010.pdf (閲覧年月日 2023 年 12 月 20 日)
- 8) 文部科学省 (2017) 「教職課程コアカリキュラム」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm
- 9) 文部科学省 (2018) 「幼稚園教育要領解説」
- 10) 文部科学省 (2021) 「短期大学について (高等教育局大学振興課短期大学係)」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/tandai/index.htm (閲覧年月日 2023 年 12 月 20 日)
- 11) 渡辺昌史 (2011) 「保育者をめざす短期大学生の体力・運動能力の縦断的变化」新見
公立大学紀要. 第 32 巻